



## 研究調査報告

### 東アジアの租界とメディア空間

# 戦後初期の香港におけるグラフ雑誌の出版状況についての覚書

— 『東風』画報と『亜洲』画報を中心に —

村井 寛志

(非文字資料研究センター 研究員)

筆者はかつて両大戦間期の上海で租界を中心に花開いた大衆文化の萌芽が香港や華僑のネットワークと密接な関係を持っていたことを、上海で出版されていた『良友』画報(1926～45)を中心に論じた<sup>1</sup>。2013年5月24日の租界メディア班の報告では、抗日戦争期の『良友』や、戦後香港で創業者伍聯徳によって創刊された同「海外版」などの分析を通じ、それらのネットワークが戦後の香港へとどのように引き継がれていったかを考察した。

とはいえ、戦後の香港の出版事情についてはいまだ明らかでない点が多く、そこで同年8月の調査では、戦後初期の香港において出版された『良友』以外の画報の事例として、香港大学、香港中文大学が所蔵する『亜洲』画報、『東風』画報、『長城』画報など、1940年代末から50年代初頭の画報について調査を行った。それぞれ数百期まで出されたもので、そのうちのごく一部とはいえ、コピー、撮影してきたものはかなりの量になる。詳細な検討には時間を要するが、以下では『東風』と『亜洲』を中心に、気がついた点を記したい。

## 1. 『東風』画報

香港中文大学が所蔵する1948年の第16期から1963年の第794期までを中心に閲覧した(ただし欠号が非常に多い)。香港大学 Special Collectionにも所蔵があるが、同書庫内資料は複写、撮影等が認められず、利用に不便なため、中文大のものを中心に閲覧した。

『東風』画報は戦後の香港ではかなり早い時期に創刊された大判の総合的画報で、30年以上の長きに渡って継続した。1947年10月19日付の創刊号には発行者〔督印人〕兼編集長〔總編輯〕鄭郁郎、印刷者胡璋榮、出版社東風有限公司などの情報が掲載されていたようだ

が<sup>2</sup>、筆者が閲覧できた16期以降の出版情報欄には編集者などの情報が一切記されていない。鄭郁郎の経歴も詳細は分からないが、韋基舜『吾土吾情Ⅲ』(成報出版社、2006)では、1968年当時『星島日報』編集長をしており、「公共關係(公關)」の訳語によって、Public Relations(PR)の概念を香港に導入・定着させた人物として紹介している(69頁)。

創刊号を例外として、筆者が閲覧した限りいずれの号も表紙に女性のポートレート写真を用いており、『良友』以来の上海の総合画報のスタイルを踏襲している(図①)。第132期(1950年5月27日)の標題紙では、当時の人気女優、「読者〔読友〕」李麗華が『東風』のバックナンバーを読んでいる写真が掲載されている(図②)。李麗華は1948年以降活動の場を上海から香港に移した人気女優で、解説記事では、「十数年前も私は時々画報を読んでいたが、当時は本屋に入ったついでに『良友』を買うという程度だった。今は『東風』を毎月読まないと気が済まない」という李の言葉を紹介している。上海の『良友』から香港の『東風』へという大衆向け画報の系譜が意識されていたことが窺われよう。



図① 『東風』39期表紙(胡楓)

1 拙稿『『良友』画報と華僑ネットワーク—香港・華僑圏との関連からみた“上海”大衆文化史—』(『東洋史研究』66-1、2007年)。

2 連民安編著『創刊号[1940's-1980's]』(《明報周刊》出版社、2012年)、19頁。



図② 『東風』を読む李麗華（『東風』132期）

『東風』第16期の表紙の下部には、香港・中国以外に、東南アジア各地から北米、南アフリカに到る、各地での年間購読料が英文で記されており、これらの地域の読者を想定していたことが窺われる。1949年末頃から（確認できたのは第106期、1949年11月28日から）文通相手を求める各地の読者の投稿を紹介する欄が設けられており、各地の読者が、性別、年齢、趣味などの自己紹介をし、住所を記している。画報が海外華僑・華人読者間の情報交換の場として機能していたことを窺わせ、これについては今後分析を深めたい。

## 2. 『亜洲』画報

香港大学 Special Collection 書庫に創刊号（1953年3月）から第39期（1956年7月）までを所蔵しているが（欠号多数）、既述のように同書庫の文献は複写、撮影禁止で、画報の研究に利用するには致命的である。保存状態が良くなく、虫食いや破損がひどいので慎重な扱いはやむを得ないとしても、デジタル化して公開するなどの処置が望まれる。

なお、香港中文大学図書館にも、第9期（1954年）以降、わずか5冊ながら所蔵されていることが検索で分かるが（最後のものは第215期、1971年）、申請したものの、目下所在不明ということで、閲覧することが出来なかった。次回訪問時に再度確認したい。

奥付の記載によれば、出版人が張国興、総経理が蘇源昌、総編輯が黄震遐、画報主編が蔡漢生、出版、販売が亜洲出版社となっている。張国興（1916～2008）は

海南島の貧しい家庭の出身で（後、父が英領ボルネオで出稼ぎ）、日中戦争中は昆明の西南聯合大学に入り、1944年には中央（通迅）社、1947年には米UP社に入社した。1952年以降、アメリカのアジア財団の支援により、香港で亜洲通迅社、亜洲出版社、亜洲影業公司を立ち上げた<sup>3</sup>。

このアジア基金は1951年に活動を開始したアメリカの財団だが、「表面上は民間団体であるが（中略）国家安全保障委員会に認可されており、連邦議会の監督委員会の知識を持ち、CIAから密かに間接的に助成されていた<sup>4</sup>」というように、冷戦下のアメリカの広報戦略の一翼を担うものであった。同誌「創刊詞」では「いかなる党派にも縛られず、いかなる団体のためにも発言しない」と謳っていたが（第1期）、『亜洲』画報の背景には明確な反共イデオロギーが存在しており、時事問題の報道などからも見て取れる。

とはいえ、時にそうした露骨な政治的主張が垣間見えるものの、同誌の内容の多くは、映画やスポーツ、異国の風景など娯楽的な内容である。また、広く海外に販売網を持ち、華僑華人の読者投稿を多く掲載していることも『東風』画報などと共通している。これらの画報の共通点と相異点を明らかにしていくことが今後の課題となろう。

民国期中国の雑誌は主要なものが次々復刻されているが、香港ではそのような条件がなく、多くの場合現地に行って実物を見るしかない。しかも大学図書館の収集も不十分であり、全貌を知るのは難しいが、今回の調査中、連民安編著『創刊号』（2012年）（注2参照）の出版を知った。同書は学術書ではないが、図書館に所蔵されていない個人収集家所蔵の資料を多く使用しており、当時出版された代表的な出版物の概要を知ることができる。こうした民間の所蔵資料へのアクセスの可能性については、今後の課題としたい。

3 黄仁『中外電影永遠的巨星』（秀威資訊科技股份有限公司、2010年）、179～180頁。

4 キンバリー・グールド・アシザワ「アメリカのフィランソロピーは日本にどう向き合ったのか」（山本正編著『戦後日米関係とフィランソロピー—民間財団が果たした役割・1945～1975年—』、ミネルヴァ書房、2008年）。アジア財団が日本や香港で行った様々な助成活動に関しては、李培徳（今井就稔訳）『戦後香港と日本におけるアジア主義—錢穆と太田耕造—』（松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか—記憶・権力・価値—』、ミネルヴァ書房、2013年）を参照。